

(注：・・・・・・は中略部分。〔 〕は補足部分。文中の青太字は引用者が強調のためにそうしました。)

転換古代史 新たな弥生像 上 縄文から平和的に移行

朝日新聞 2003(H15)年9月8日

弥生文化は九州で幕を開けた。その始まりとほぼ時を同じくして西北九州の沿岸部に出現する支石墓。埋葬施設の上に数個の小石を置き、ふたとなる大きな石を支える墓制だ。朝鮮半島にルーツを持ち、弥生文化の源流を探る源流を探る手がかりとされる。

支石墓に眠る縄文人

佐賀県呼子町の砂丘にある大友遺跡は、支石墓を核とした弥生早期の遺跡だ。九州大は99年と00年に実施した調査で、数多くの人骨を発見した。・・・・・・弥生時代の始まりを担っていたのは誰か、という謎に迫る発見だった。

北部九州の甕棺(かめかん)に眠る〔弥生〕中期の人骨は、身長が高くのっぺりした顔の「渡来系」だ。早期の弥生文化も彼らが担っていたと考えられてきただけに、同じ骨格が予想された。だが、〔弥生早期の遺跡で



＜彫りの深い縄文系の人顔(右)と、のっぺりした渡来系の人顔の復元図＝石井礼子画・週刊朝日百科「日本の歴史」から＞

あるにもかかわらず〕大友の人骨は、背が低くがっしりとして彫りの深い顔つき——きわめて縄文的なものだった。

大友同じく玄界灘にのぞむ福岡県志摩町の新町遺跡の〔朝鮮半島にルーツを持つ〕支石墓から出土した人骨もまた、縄文的な特徴を備えていた。

渡来人の文化を示す墓に眠る縄文人……。だが、弥生文化＝渡来人、縄文文化＝在来人、という固定観念を離れてみると、違う世界が見えてくる。

・・・・・・初期の弥生文化を担ったのは、むしろ縄文的な人々だったのではないか。

〔弥生〕中期以降になると、弥生文化の中心的担い手は渡来系の人たちに移る。それでは、早・前期の間、縄文以来の在来人と渡来人にあどのような関係があったのだろうか。早期の始まりを一気に500年もさかのぼらせた新説にもとづけば……。

渡来人とともに共存

・・・・・・弥生文化への熟成期間が長くなった、ととらえるのも手・・・・・・。日本列島では、**縄文の採集生活者と弥生の農耕者による共存が、相当期間があった・・・・・・。比較的平和な異文化共存の結論として、徐々に農耕文化に移行していった・・・・・・。**

佐賀県の都留遺跡では、朝鮮系である牛角把手(ぎゅうかくとつて)の無文土器と、在地の弥生土器を組み合わせたこともの棺も見つかっている。・・・・・・**渡来人と在来人で、お互いが排除する関係にあったとは思えない・・・・・・。**

長崎県・壱岐の原(はる)の辻遺跡は「魏志倭人伝」に登場する一支(いき)国の「首都」だ。ここで船着場の遺構から調査事務所まで200ほどの場所に、集中して朝鮮系の無文土器が見つかる。時代は少し後の中期前半からのものだ

が、・・・・この辺に渡来人のコロニーがあった・・・・。コロニー以外の遺跡からは、九州本土で出土するのと同型の土器が出ており、在来人の存在をうかがわせる。

・・・・渡来人と一支国の人々は共生し、ゆっくりと融合していった・・・・。

それでは、弥生早・前期文化のイニシアチブをとったのはどちらだったのだろうか。

・・・・渡来人の規模は小さく、むしろ縄文からの在来人が弥生文化を担った・・・・。朝鮮半島と北部九州は縄文時代から自由に行き来していた関係。その素地があれば、縄文以来の人々が文化を選択的に採り入れたとしても問題ない・・・・。

縄文から弥生への移行を、金属器や水田稲作など新しい技術を持った渡来人が、在来人を駆逐した過程とする見方が、従来は一般的だった。だが、新たに見えてきたのは、**ゆっくりと、平和的な移行であり、主役として浮かび上がってくるのは、渡来人でも在来人でもない、弥生文化を身につけた在来人、「縄文系弥生人」とでも呼ぶべき人たちのたくましい姿だ。**